INTERVIEW

斎藤和義

名曲が生まれるのは、自棄になったり恋した時。

シングル『君の顔が好きだ』で話題のシンガー・ソング・ライター斎藤和義。2ndアルバム『素敵な匂いの世界』で、独自でユーモラスな歌詞、シンプルかつキャッチーなギター・サウンドを展開している。αステイション土曜（20：00PM～21：00PM）『ニューベリー・スピリット』のレギュラーを持つ彼に直撃。

ー　あの、お姉さんと妹さんに挟まれてるんですね、家族構成。

「そうなんですよ。反発してすごく男っぽくなるやつか、同化しちゃうかどっちかですよね。で、結構同化した質で。うちの姉貴も綺麗に化粧して外に行くんだけど、帰って取ったら"なぁんだ"と思ったりするし、妹も裸でうろうろしてるし」

ー　裸？随分開放的な家ですね（笑）

「だから女性に対して余計な幻想を抱かずに来たと思いますけど」

ー　『君の顔が好きだ』って歌はやっぱり女性としては一瞬動揺しましたねぇ。

「ああいう風に部分的に褒められるのは嬉しいとか、可愛くなきゃだめなんですか？ってすねちゃう人もいますね。あと、あれは宗教ブームで作ったんですか？とか。形あるものを僕は信じるってのは、神様とか見えないものに皆が手を合わせるっていう宗教ブームに反発して作られたんですよね、齋藤さんとか。それは深読みだ、と思うんですけど。でも色んな解釈されるから面白いですよ。ま、そん時付き合ってたお姉ちゃんの顔が好きだったっていう単純な理由なんです」

ー（笑）直接的意味だったんですね。

「あの曲は付き合ってたお姉ちゃんに

INTERVIEW

Birthday Suit

街に降り立った、バースディ・スーツの夏。

ソウル・テイストを秘めたバンド、バースディ・スーツ。松崎真人と佐木伸誘の二人の織り成すサウンドと歌には、マニアックなパック・グラウンドとシーンにリンクするポップな感覚が混在する。2nd『ホーム&アウェイ』は、そんな彼らのポップな面がぐっとフィーチャー、しかも思いっきり夏、なアルバムだ。αステイション『ラヴ・トラック・キョート』木曜（21：00～24：00）のレギュラーも持つ彼らにインタビュー。

ー　αステイションのレギュラーも板について、京都にはもう馴染まれました？

佐木「いえ、全然」

ー　あら？（笑）そうなんですか？

佐木「やっぱり奥が深いですよね。京都、大阪、神戸、全然違うってことをラジオやってからわかりましたね」

ー　ラジオは歌詞のイメージとは違った面のバースディ～がありますよね。

松崎「今ここで自分が考えているというようなことを垂れ流すようなものよりも、いつかどこかで起こった或いは誰にでも起こりうること、みたいな言葉の使い方が僕らの詞では多いから、そういう意味ではレコードの中の主人公になって歌っている彼らと、全くの素でラジオで喋ってる僕らは当然違いますよね」

ー　1stが『クローゼット』で今回が『ホーム&アウェイ』。内容的にも1stがパーソナルだったのに比べ、今作はもっと外に向けたものになっている、その経過にはどういう変化が？

松崎「1stを作った時に僕らと同世代かそれより上の、音楽を一杯聞いてきたような人達に"こういうアルバムが出来て良かったね"っていうような反応をたくさんもらったんです。そういう、今の音楽シーン全体に対してある種ジレンマを感じながら音楽の送り手として仕事してる人達からそう言われたことは嬉しいし、誠実に作った甲斐あったなって思うけど、そこに止まっていることは本意ではないというか。一回作った宇宙の外にはまた何か新しい宇宙があるはずだし、1stはともすれば一般のリスナーからは、シーン全体を俯瞰で捉えて少し斜に構えてるような捉え方をされるんじゃないかなって。それじゃ今度は『ベルリン天使の詩』じゃないですけど（笑）街の中に降り立って僕らも、94年の日本の音楽シーンの中で、相手の流儀で戦うことも必要だと。で、殴れるだけ殴ってパッと離れる（笑）『ヒット&アウェイ』というか攻撃的というか道場破りみたいなものですね（笑）」

ー　先ずは郷に入ってみようと？

佐木「うん。敵地でタイトル・マッチとかやると普通不利になるから一番得意な場所でやる方が勝てるものだけど、そうじゃないとこで戦ってる内に僕らの世界も広がるし、今度は逆に僕らのいる場所がホームになってくれればいいと言うか、そういう方向に向かっていく内は歌に対して誠実でいられるんじゃないかと」

ー　ところでライヴがあるんですよね？

佐木「そうです。そのライヴで重大発表があるんです」

ー　重大発表？何だろう、何ですか？

松崎「それはライヴで発表します（笑）」

協力／M・MANIA、東芝EMI

※9日2日（金）7：30PM／前3、605円、当4、120円（1D付）／心斎橋ミューズホール／問い合せ（06）357・9900サウンド・クリエーター

『ホーム&アウェイ』
3,000円（税込）
／東芝EMI

振られた時にその娘駅まで送ってったその帰りにふらっと楽器屋に寄って、振られた自棄買いでピアノを買ったんですよ、デジピなんですけど。それでポロポロ弾いてたら曲が出来て。歌詞は、その頃ラップ好きの友達とライヴとか行ってて、行ってる内にあのラップのずーっと言葉を羅列していくのって面白いなと思ってて、あれを真似したかったんですよ」

ー ラップだったんですか。でも、何か曲ってポロポロ出来る人みたいですねぇ。

「そんなことないですよ。何か刺激がないと出来ませんね。締切とか切羽詰まらないと。恋したり振られたりとかの一大イベントがあるとポロっと出来たりするんですけどね」

ー でもデビュー以来2カ月毎にシングルをリリースしてるわけじゃないですか？

「それはデビューまでに書き溜めてた曲があったから。それで1枚目2枚目と早く出来たんですけど、3枚目が問題なわけで。もうストックないですから」

ー シングル『歩いて帰ろう』のレコーディングはもう辛かったですか？

「ええ。それはもう歌入れ当日に持っていきましたから。その時2ndのレコーディングと重なってたり、ライヴやリハーサルやキャンペーンがあったりで結構忙しくて、もう単純にスタッフに向けて。サブタイトルが"休ませろ"なんです」

ー （一同爆笑）

協力／シンコーミュージック、ファンハウス、αステイション

※10月17日（月）／心斎橋クラブクアトロ／問い合せ キョードー大阪（06）345・2500

『彼女』930円（税込）／ファンハウス

INTERVIEW the Pillows いよいよ面白くなってきたギター・バンド

『クール・スパイス』2,300円（税込）／キング・レコード

ベーシストの脱退やレコード会社の移籍で、活動がままならない状態にあったピロウズが、7月に2年振りの新作『クール・スパイス』をリリース。ライヴで発するダイナミズムの再現を課題に、ギター・バンド＝ピロウズの繊細さに、ジャズやワルツの響きのスタイリッシュなテイストが取り込まれ、一方ハードに突っ走るという一面も味わえる表情豊かな作品だ。秋には次のアルバムが出る予定の彼ら。VOの山中さわおにインタビュー。

ー 今朝レコーディングが終わったばかり（笑）というシングル『デイ・ドリーム・ワンダー』が今月24日に出ますね。

「はい、ほんっとに出来たばっかり（笑）。曲自体は前にあって、アルバム『クール～』（全7曲）は最初8曲入りで、そこに入る予定だったんですがもっとアレンジも良くなるだろうってメンバーと話してて、じゃあシングルに取っておこうってことになって。そのシングル以降、前からお願いしてた吉田仁さんにプロデュースをして頂けることになって、やっと片思いが通じまして（笑）」

ー 最近コレクターズや綿内克幸といった"この辺"のプロデューズでひっぱりだこの元サロンミュージックの吉田仁さんですね。片思いだったんですか（笑）。

「ていうか知らなかったみたいですね ピロウズのこと（笑）で、ライヴ見てすぐ気に入って下さって。その後は早くて、レコーディングはプリプロも合わせてあっという間に終わりました」

ー ライヴでバンドの雰囲気とかをすぐわかって下さった、と？

「それと今ベース手伝って下さってるスーパー・バッドの鹿島さんて方が仁さんと以前一緒に仕事をしてて、それで山中とは気が合うよって聞いてたしバンドをメインで考えてくれる人だって鹿島さんから紹介されてたから、意外と思いきった意見でも素直に聞けるというか、仁さんてさすがだなって感じなんだなぁ」

ー 逆に"このジャンル"でひっぱりだこだからこそ同一視されない為にも避けそうな気がするんですけど。

「やってみてわかったんだけど、仁さんは流行とか自分の色を押し付ける人じゃないのね。そのバンドの色をちゃんと考えてくれる。結果的に仁さんらしい音ってのはあると思うけど、才能もだけど人がいいんですよ、とにかく」

ー アルバム『クール～』の中の『開かない扉の前で』、これはシングル『デイ・ドリーム～』のカップリング曲でもありますが、その歌詞に2年間レコーディング出来なかったジレンマみたいなものがにじみ出てるような気がしたんですけど、そういうとこありました？

「それ言ってくれたの初めてです。でもそれはかなり正解（笑）こんなにいい歌なのにレコードが出せない、でもレコード会社移籍してやっと出せる、今度はやるぞっていう決着の歌です（笑）。具体的にレコーディングだけじゃないけど活動全般には（そういう思いが）あるなぁ」

協力／バッド・ミュージック、キング・レコード

取材・文／早川加奈子